

部将たちが、信長の意に添うために立派な邸宅を建てたこと、そして、城には7層からなる塔（天主閣）があり、天主閣内部の様子を記述して驚くべき建築様式であり、ヨーロッパの城と比べて遜色のないことを述べています。

### 『信長公記』にみる安土の「伴天連」

信長がキリシタンにとって寛大であったことはよく知られていますが、彼がキリスト教と接触を持ったのは永禄12(1569)年にイエズス会宣教師ルイス・フロイスに布教を許可したことからでした。

安土での布教については、天主閣が完成した翌年の天正8(1580)年にイエズス会宣教師で信長の信頼が厚かった司祭ニュッキ・オルガンティーノが、安土に修道院の建設とその地所を得たい旨を信長に願い出ています。

このことについて、『信長公記』ではキリスト教宣教師を「伴天連」と呼び、天正8(1580)年の閏3月16日から安土城の南にある新道の北に掘割を掘り、土を田に埋め立てて伴天連に与えたこと、また、翌天正9(1581)年10月7日の鷹狩りの帰りに伴天連の所(修道院)に立ち寄り、土木工事の指示をしていたこと、さらに、10月20日から引き続いて伴天連の家を建てさせるための沼地を埋め立て、町屋を建築(移築)させたことなどが書かれています。

### 『1581年日本年報』にみる安土の修道院

一方、『1581年日本年報』にはオルガンティーノの望んだ高貴な人びとの屋敷に隣接する場所に修道院を建築することにこそ、教宣面で意味があるということに信長が理解を示して、安土山と町の間にある入り込んだ湖の一部を埋め立てて与えたこと、オルガンティーノやキリシタンたちはこれを喜び、信長の城を除けば最も立派なものと思われる3階建ての建物を建てたこと、この建物が落成すると、信長自身が見学を訪れ「いとも愛想よく司祭と語らって工事を大いに褒め讃え、その場にいた人たちも司祭た

ちをたいそう称賛した」<sup>(1)</sup> こと、さらに信長はこの地所が小さいとして、近くの住宅を撤去させてその地をキリシタンに与えたこと、そして、信長がオルガンティーノに200クルザードを資金の援助として与えたことなどが書かれています。本書のこの部分では『信長公記』に記載されているような具体的に月日を示した説明はなされていません。

### 信長の海外志向

このように、『信長公記』と『1581年日本年報』に書かれた安土とキリスト教についての記述は大筋で一致し、両書を比べると双方の記述内容の空白部分を補うことができます。そして、そこから信長の安土に関する考え方を推察することができます。

信長はこの城の建築にあたって、中世の文化人に共通して見られる「唐様」に強い執着を示しています。この当時、彼が持っていた海外知識の中心は「南蛮」の台頭があったものの、後世の人々から唐物数寄(好き)と評されているように、中国(当時は明)文化に対する志向がより強かったものと思われます。従って、日本で初めてとなる大城郭の建築に唐様形式を取り入れて山上に高く建設することで、自らの権威を高めようとしたのではないのでしょうか。そこへ、信長自身も想定していたと思われるイエズス会宣教師からの教会建築の願いを受け、彼らが予測もしなかった程の広大な土地を城下の重要地点に与えることで、3階建てのひときわ目立つヨーロッパ風建築物を建てさせました。そして、当時としてはたいへんに国際色の強い町を作り出したのです。

このように、信長が心血を注いだ安土城とその城下も、天正10(1582)年の信長が死去した「本能寺の変」の直後に焼失してしまいました。天主閣が完成した3年後のことでした。しかし、幻となった城や町は400年を経た現在、発掘や調査の結果、城の形や修道院の位置が推定され、安土桃山時代を代表する素晴らしい文化が甦ってきています。

### 註

(1) 東光博英訳「1581年度、日本年報」52頁。

### 参考文献

- 奥野高広・岩沢愿彦 校註『信長公記』角川ソフィア文庫 2001年。
- 『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第Ⅲ期第6巻』東光博英訳「1581年度、日本年報」同朋社出版 1991年。
- 『信長・秀吉の城と都市』岐阜市歴史博物館 1991年。



マルカントニオ・チャッピ『教皇グレゴリオ13世偉業要略』(ローマ、1596)に見られる安土の修道院(本学図書館所蔵)。

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)